

■第11回「哲学系読書会(仮)」

■日 時：2021年03月11(木) 18時より21時半まで

■課題書：ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』(岩波文庫、2003年、原書1918年)

野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』(ちくま学芸文庫、2000年、親本2002年)

■参考文献：入不二基義『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』(NHK)出版、2006年)

永井 均『ウィトゲンシュタイン入門』(ちくま新書、1995年)

黒田 亘・編『ウィトゲンシュタイン セレクション』(平凡社ライブラリー、2000年)

ラッセル『論理的原子論の哲学』(ちくま学芸文庫、原書1918年)

一ノ瀬正樹『英米哲学講義』(ちくま学芸文庫、2016年)

■報 告：山本

■会 場：大阪市／北区民ホール・第3会議室 (TEL.06-6315-1500)

★前半のまとめ (『読む』 p.210)

① 1番台で出発点となる現実世界についての確認。世界は事実から成り立つ。

② 2-0番台で世界への可能性へと眼が向けられ、それに伴って2-1番台で像に関して一般的に論じられる。

③ 3-0番台で像としての思考について軽く触れたあと、3-1番台から像ということで中心的に考えられている命題についての検討に入る。

④以下3番台は主として命題の名への分析について論じられる。

⑤ 4.0番台で主として命題の意味について論じられる。

⑥ 3-1から4.0番台までが、『論考』の理論的中心の前半：名付けて「要素命題論」(『読む』 p.210)

[野矢による後半の構成]

6.真理操作 (4-2～5-5423)

7.基底／独我論 (5-55～5-641)

8 操作と形式／数・論理学・数学・自然科学 (6～6-3751)

9.倫 理 (6-4～6-45)

10.謎の解消 (6-5～7)

■後半のレジュメ ([ ]内は山本のコメント)

6. 真理操作 (4-2～5-5423)

6-1. 真理表

「命題の意味とは、事態の成立・不成立の可能性と命題との一致・不一致である。(4-2)

←[真／偽]

「もっとも単純な命題、すなわち要素命題は、一つの事態の成立を主張する。」(4-21)

註46) 要素命題：否定「 $\sim$ 」、論理和「 $\vee$ 」、論理積「 $\cdot$ 」。「(x)」や「(∃)」といった論理記号をいっさい含まない形で、名の配列として表しうる命題を「要素命題」と呼ぶ。要素命題を否定したり、論理定項で接続したりすることによって、複合命題が作られる。←[名の配列=名の論理形式] (『論考』 p.196)

「要素命題の特徴は、いかなる要素命題もそれと両立不可能ではないことにある。」(4-21)

(cf; 「ある要素命題から他の要素命題が導出されることはない。」 5-134)

←[要素命題の真偽は他の要素命題の真偽に対して論理的に何の影響も与えない。これが要素命題の相互独立性、しかし、なぜ相互独立でなければならないのかの答えは『論考』にはない。この命題は間違っている。色の場合は両立不可能 (6-3751)。後期Wは撤回。『読む』 p.149～p.153]

「要素命題は、名からなる。それは名の連関、名の連鎖である。」(4-22)

「名は、ただ要素命題という文脈においてのみ、命題に現れる。」(4-23)

「要素命題が真ならば、その事態は成立している。偽ならば、成立していない。」(4-25)

「すべての真な要素命題の列挙によって、世界は完全に記述される。世界は、すべての要素命題を挙げ、さらにどれが真でどれが偽かを付け加えれば、完全に記述される。」(4-26) ←[cf; 論理的原子論]

「n個の事態の成立・不成立に関しては、 $K_n = \sum_{\nu=0}^n \binom{n}{\nu} [=2^n]$  通りの可能性がある。どの事態の組合せも成り立ちうるが、ある組合せが成り立って入るときには、他の組合せは成り立っていない。」(4-27)

「これらの組合せに対応して、要素命題の真—および偽—の可能性が同じだけある。」(4-28)

「要素命題の真理可能性は、事態の成立・不成立の可能性を意味している。」(4-3)

**\* 真理表**

p	q	r	p	q
真	真	真	真	真
偽	真	真	偽	真
真	偽	真	真	偽
真	真	偽	偽	偽
偽	偽	真		
偽	真	偽		
真	偽	偽		
偽	偽	偽		

「命題は、要素命題の真理可能性との一致・不一致を表現したものにはほかならない。」(4-4)

「要素命題の真理可能性が命題の真偽の条件である。」(4-41)

「要素命題の導入が、他のすべての種類の命題を理解するための基礎となる。(…) 実際、一般命題を見るならば、その理解が要素命題の理解に依存していることは、一見して明らかである。」(4-411)

「ある命題がn個の要素命題の真理可能性のどれと一致しどれと一致しないかに関して、 $\sum_{k=0}^n \binom{n}{k} = L_n [=2^n]$  通りの可能性がある。」(4-42)

「要素命題の真理可能性との一致および不一致の表現が、それぞれの命題の真理条件を表している。命題はその真理条件の一組に対する表現にほかならない。」(4-431)

**註46) 真理条件**：命題を真にするような事態の成立・不成立の組合せの全体を、その命題の真理条件という。(『論考』p.197)

**6-2. トートロジー(同語反復)と矛盾**

真理条件の可能な組の中の極端な二つの場合 (4-46 ~ 4-4661)

「要素命題のすべての真理可能性に対してその命題が真になる場合」= トートロジー

(cf; [「論理学の命題はトートロジーである。」(6-1) ]

「すべての真理可能性に対してその命題が偽になる場合」= 矛盾 (4-46)

「命題は、それが語っていることをことを示しているが、トートロジーと矛盾は、それが何も語らないことを示している。

トートロジーは無条件に真であり、それゆえ真理条件をもたない。そして、矛盾は真となる条件をまったくもたない。

トートロジーと矛盾は無意味である。」(4-461)

「しかしトートロジーと矛盾はナンセンスではない。両者とも、いわば「0」が算術の記号体系に属しているように、記号体系に属している。」(4-4611)

「トートロジーと矛盾は現実に対する像ではない。それは可能な状況を描写しない。」(4-462)

「(……) トートロジーは、現実がありうる位置として論理空間の全体を——無限に——許容する。矛盾は、論理空間全体を埋め尽くし、現実の場所を与えない。かくして、どちらも現実を規定するすべをいっさい失う。」(4-463) ←[無限については議論あり]

トートロジーが真であることは確実、命題が真であることは可能、矛盾の場合は不可能←確率論に必要とされる初段階の萌芽がここにある。(4-464)

トートロジーと矛盾は記号結合の限界事例である。すなわち、記号結合の消失点である。(4-466))

**註54) 「無意味, sinnlos」と「ナンセンス, unsinnig」の区別。**

論理形式に違反した記号列はナンセンス。トートロジーも矛盾も論理的形式に違反した記号列ではないが、共に世界について何も語るものではない。(『論考』p.198)

**6-3. 一般命題**

「ひとが予見不可能な（すなわち構成不可能）形式をもつ命題など存在しえない。このことは、一般命題形式が存在することを示している。「事実はかくかくである」——これが命題の一般形式である。」(4-5) ←[現実の像である命題から論理的に構成されるもの=事態の記述。cf;「命題は現実の像である。」(4-01)]

「命題は、要素命題の総体から導かれるもので、すべてである。あらゆる命題は要素命題の一般化であると言うことができる。(4-52)

「一般的な命題形式は一つの変項である。」(4-53)

#### 6-4. 因果連鎖と意志の自由

「命題は要素命題の真理関数である。

(要素命題は自分自身の真理関数である。)」(5) ←[(5-101)で真理関数の組合せを例示・解説。

ex, (真真真真) (p,q) はトートロジー——pならばp、かつ、qならばq ( $p \supset p, q \supset q$ ) ]

「真理関数は一列に順序づけられる。

「これが確率論の基礎にある。」(5-1) ←[トートロジーが真であることは確実、命題が真であることは可能、矛盾の場合は不可能(4-464)]

「すべての導出(演繹)はア・プリオリに成立している。」(5-133)

←[強いア・プリオリ性:「操作はア・プリオリなのである。この操作のア・プリオリ性が、論理のア・プリオリ性にほかならない。cf; 弱いア・プリオリ性: 論理空間はそれがどのような対象を構成要素としてもつかに依存している。『読む』p.180～p.187]

「ある要素命題から他の要素命題が導出(演繹)されることはない。」(5-134) ←[名の配列として表しうる命題から他の名の配列は演繹されない]

「現在の出来事から未来の出来事へと推論することは不可能なのである。

因果連鎖を信じること、これこそ迷信にほかならない。」(5-1362) ←[風が吹けば桶屋が儲かる] 未来の行為をいま知ることはできない。ここに意志の自由がある。因果性が論理的推論の必然性のごとき内的必然性であったとすれば、その場合のみ、われわれは未来の行為を現在知りうることになる。——実際に何事かを知っていることと、その何事かが事実であることとは、論理的に必然な関係にある。[それゆえ、未来の行為を知りえたならば、その行為は実際に起こるのでなければならぬ。]

([他方]「Aはpが成立していることを知っている」は、pがトートロジーのときは、無意味となる。)(5-1362) ←[Aが「 $p=p$ 」であることを知っている場合は、無意味]

#### 6-5 真理関数／真理操作

「すべての命題は要素命題に真理操作を施した結果である。

真理操作とは、要素命題から真理関数を作る方法である。

真理操作の本質からして、要素命題から真理関数を作る場合と同じ仕方で、真理関数からも新たな真理関数が作られる。すべての真理操作は、要素命題の真理関数から再び要素命題の真理関数を、すなわち命題を、作り出す。つまり、要素命題に真理操作を施した結果にさらに真理操作を続けて施しても、その結果はすべて、けっきょくのところ要素命題に一つの真理操作を施した結果となるのである。

かくして、どの命題も要素命題に真理操作を施した結果である。」(5-3)

「すべての真理関数は、要素命題に対して真理操作を有限回くりかえし適用することによって得られる。」(5-32) ←[野矢によれば「上限なき有限」、有限の経験しかもてない人間には有限の対象しか与えられない。→論理空間が有限であることの表明。『読む』p.199～p.202]

「ここにおいて、「論理的对象」すなわち「論理定項」(フレーゲとラッセルの意味における)は存在しないことが示される。(5-4) →[論理定項は「名」ではない]

「なぜなら——どのような真理操作を真理関数に施しても、その結果が要素命題の真理関数として同じものであるならば、それらは同一だからである。」(5-41)

「(……) 論理学の命題はすべて同じことを語っている。つまり、何ごとも語っていないのである。」

(5-43) ←[論理学は、同じことの言いかえという意味か?]

「真理関数は実質的な関数ではない。」(5-44) ←[Wによれば操作は関数ではない。『読む』p.177]

★以降、5-5423 まで、フレーゲとラッセルの論理記法の批判とあるべき論理記法について述べる。  
また、『プリンキピア・マテマティカ』批判←定義や基本法則を言葉で（非形式的に）導入する遣り方は許されないと批判（5-452）

### ★命題的態度を含む命題どう分析するかという問題

（\*「命題的態度」という用語はラッセルのもの）

「一般的命題形式では、命題はただ真理操作の基底としてのみ、他の命題中に現れる。」（5-54）

←[この主張は『論考』の中心をなすものである。「Aは p と信じる」は命題 p に真理操作を施したのではないようには思われる。『読む』 p.234]

「一見したところ、ある命題はこれとは別の仕方でも他の命題中に現れうるかのように思われる。

とくに、「Aは p であると信じている」や「Aは p と考える」といった心理に関わる命題形式において、そのように思われる。

つまり、表面的に見れば、こうした命題においては命題 p が対象Aとある種の間接関係を持っているかのように見えるのである。」（5-541）

「しかし、明らかに、「Aは p と信じている」「Aは p と考える」「Aは p と語る」は、もとをたどれば「p」は p と語る」という形式となる。そしてここで問題になるのは、**事実と対象の対応関係ではなく、対象と対象の対応を通して与えられる事実相互の関係**なのである。」（5-542）

←[この場合、人物Aは対象ではない。事実相互の対応関係とは、<命題「p」が表す事実>と<命題「p」という言語に関する事実>のこと。像(言語)もまたひとつの事実。cf; 命題 3-143「命題記号がひとつの事実であることは……」、信念文のような命題的態度を含む文で真に問題になっているのは、主体と事実の関係ではない。それは言語が世界の像になっているという意味論的關係。『読む』 p.235 ~ p.236]

### 6-6野矢の解説（『論考』 p. 229~233）

- ①論理形式に従った名の配列は「要素命題」と呼ばれるが、この中には「否定命題」は含まれていない。
- ②否定：「ではない」は「名」ではない。（cf; 否定的事実は存在しない）
- ③二回否定すると否定はキャンセルということから、「ではない」は対象を表した表現ではなく、なんらかの操作であることが証される。
- ④ここにおいて「論理空間」という道具立てを正式に導入。
- ⑤命題は論理空間中にそれが真となる領域を規定する。←[真理領域]
- ⑥そこでたとえば p を否定するとは、p が規定する領域の外側に取り出すことと捉えることができる。
- ⑦このような操作は「真理操作」と呼ばれる。否定以外にも、「または」「かつ」「ならば」といった論理に関わる語彙も、真理操作を表したものと捉えられる。（cf; 原始記号）
- ⑧まとめると、**命題と事実の組はそれぞれ名と対象に分解→論理形式に従って構成された名の配列は要素命題→対象の配列は事態→事態の成立・不成立の可能性によって論理空間→論理空間上の操作として真理操作が導入→その真理操作に従って→要素命題は複合的命題へと構成される。**
- ⑨これが、可能な命題のすべて、すなわち「語りうるもの」のすべてにほかならない。

### 7. 基底／独我論（5-55~5-641）

#### 7-1. 真理操作の規底は要素命題

「いまやわれわれは、要素命題のすべての可能な形式に関する問いに、ア・プリアリな仕方では答えねばならない。

要素命題は名からなる。しかし、われわれは異なる指示対象をもった名がいくつあるのかを言うことができない。それゆえ、名の合成である要素命題を〔ア・プリアリに〕挙げることもできない。

（5-55）←[名（対象）は経験に依存するということ]

「われわれの根本原則はこうである。およそ論理によって決定される問いは、論理のみによってすべて決定されねばならない。」（5-551）←[論理は経験に依存しないということ]

「論理は何かがこのようにあるといういかなる**経験よりも前**にある。

論理は「いかに」よりも前にあるが、「何が」よりも前ではない。」(5-552) ←[論理は先験的だが、「何が=対象」に対しては先験的ではない。]

「**経験的実在は対象の総体によって限界づけられる。限界は再び要素命題の総体において示される。**」(5-5561) ←[切り出される対象は、私がどのような**存在論的経験**をしているかによる。]『読む』p.216]

「いかなる要素命題が存在するのかは、論理の適用によって決まる。  
適用のうちにあることを、論理があらかじめ捉ええることはできない。  
論理はその適用と齟齬をきたしてはならない。これは明かである。  
とはいえ、論理はその適用に接していなければならない。  
それゆえ、論理とその適用とはお互いに自分の持ち分を超えることがあってはならない。」(5-557)

## 7-2. 言語と世界を限るもの・独我論について

「**私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。**」(5-6) ←[論理空間の限界]

「論理は世界を満たす。世界の限界は論理の限界でもある。

(…)「あれは存在しない」ということでいくつかの可能性が排除されるように思われる。しかし、このような可能性の排除は世界の事実ではありえない。もし事実だとすれば、論理は世界の限界を超えていなければならない。そのとき論理は世界の限界を外側から眺めうることになる。

**思考しえぬことをわれわれは思考することはできない。それゆえ、思考しえぬことをわれわれは語ることもできない。」**(5-61)

「この見解が、**独我論はどの程度正しいのか**という問いに答える鍵となる。←[この見解=存在論は語り得ない]

すなわち、独我論の言わんとするところはまったく正しい。ただ、それは語られえず、示されるのである。

**世界が私の世界であることは、この言語（私が理解する唯一の言語）の限界が私の世界の限界を意味することに示されている。」**(5-62) →[私の言語の限界が私の世界の限界]

「世界と生はひとつである。」(5-621) ←[唯一の論理空間]

「私は私の世界である。(ミクロコスモス)」(5-63)

## 7-3. 野矢の分析によると (『読む』 p. 222~227)

「私の言語の限界=論理空間の限界」→論理空間とは現実世界をそこに含むような可能な状況の総体であるから「世界の限界」にほかならない→しかし「世界」と「世界の限界」は同じではなく別物→**世界とは論理空間の中の現実化した一部分にすぎない**→とすれば、私の世界が世界とその論理空間を共有する限り、私の世界の限界と世界の限界は一致するが→非独我論者の立場からは「世界=私の世界」とはならない(「私の世界は世界の一部」に過ぎないから)

しかしここで、Wの論点は以下の通り

「**事実の総体**」として立ち現れた世界を分析の結果

→「**対象の総体**」を切り出す(不変の形式=物体)

→私は私が出会ってきた**対象の総体に基づいて思考の可能性を開く**しかない。

→**世界もまた私の思考可能性の内におさまる**

→私の出会ってきた**対象の総体=世界が含む対象の総体**

→「**世界は私の世界=独我論**」

→独我論の主張(の正しさ)は、「**世界**」を**思考可能なもの=「語りうるもの」**に局限したから

→「語り」の可能性は世界に存在する諸対象によって開かれる

→世界と私の世界が存在論的に等しいものとなる

→**対象領域=存在論の等しさこそが、生の豊かさの等しさを示す**

→**論理空間は操作と生(私の生)によって決定されるが**

→**生とは対象との出会い=存在論的経験によって**

→私の**思考可能性は私の生によって限界づけられている**←[「世界と生はひとつである。」(5-621)]

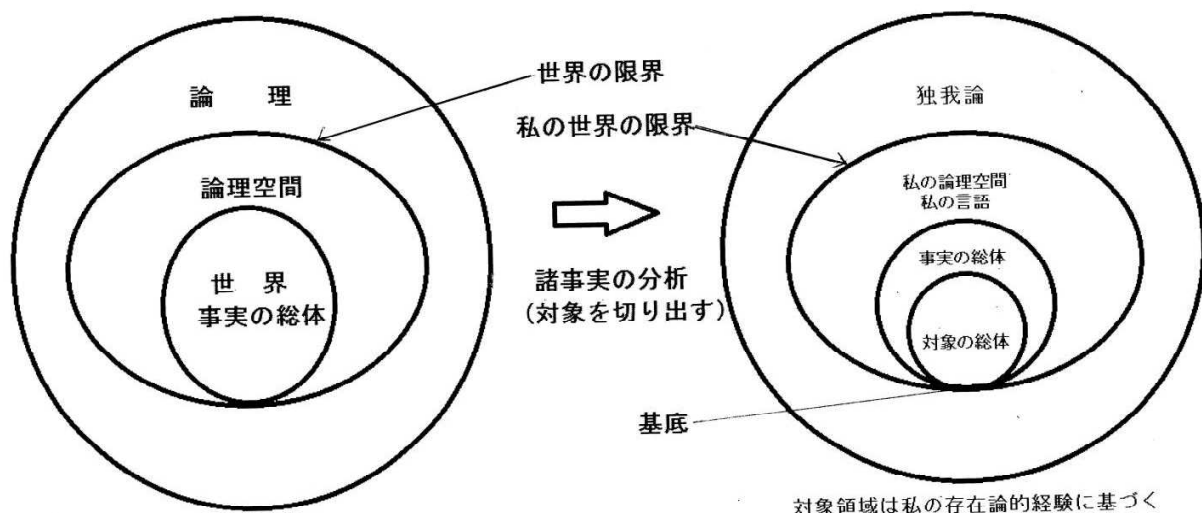
→世界も私の**思考可能性の内**に位置づけられる

→世界が用意する**存在論は、私の生によって与えられる存在論に等しい**

→ 「存在論的独我論」

- 独我論と非独我論の分かれ目は、私の理解しえない領域。語りえない領域をも、[世界]として認めるか否かにかかっている。←「世界は成立していることがらの総体である。」(1)
- 他の論理空間の「可能性」は思考可能な可能性ではない。他の存在論は語ることも示すこともできない。

★概念図



論理=強いア・プリオリ性、論理空間=弱いア・プリオリ性 (対象/基底に基づく論理性) \*野矢

7-4. 主体否定テーゼ

「思考を表象する主体 (主観,Subjekt) は存在しない。

「私が見出した世界」という本を私が書くとすれば、そこでは私の身体について報告が為され、またどの部分が私の意志に従いどの部分が従わないか等が語られねばならないだろう。これはすなわち主体を孤立させる方法である。つまり、この本の中で論じることができない唯一のもの、それが主体なのである。」(5-631)

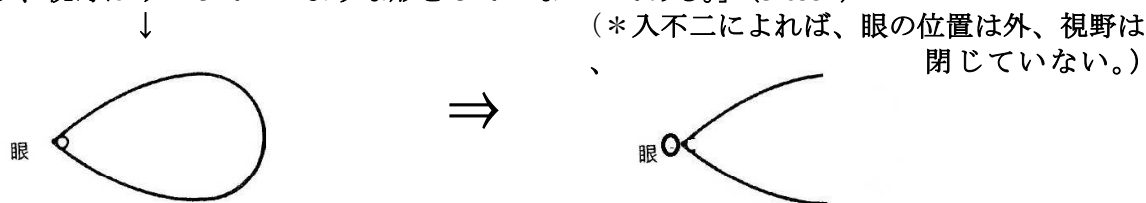
「主体は世界に属さない。それは世界の限界 (Grenze) である。」(5-632)

「世界の中のどこに形而上学的な主体は認められうるのか。

君は、これは眼と視野の関係と同じ事情だと言う。だが、君は現実に眼を見ることはない。

そして、視野におけるいかなるものからも、それが眼によって見られていることは推察されない。」(5-633)

「つまり、視野はけっしてこのような形をしていないのである。」(5-6331)



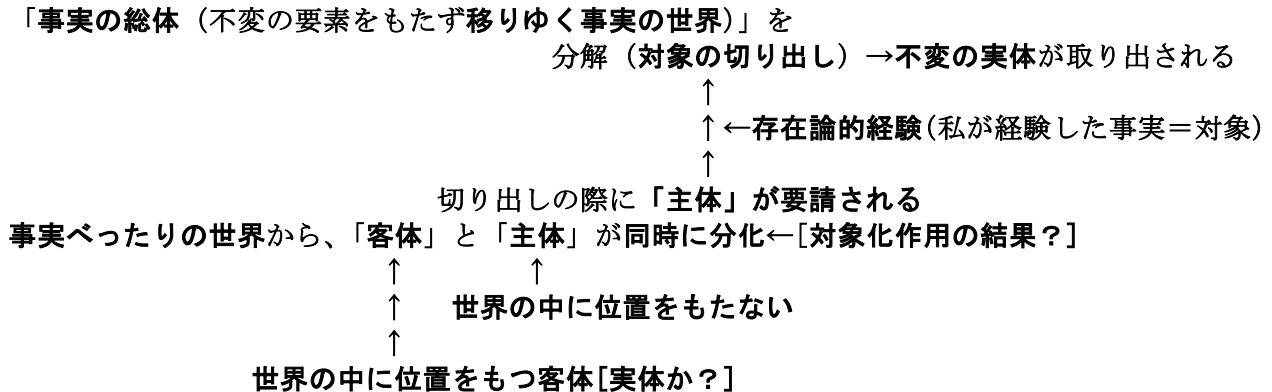
「このことは、われわれの経験のいかなる部分もア・プリオリではないということ結びついている。

われわれが見えるものはすべて、また別のようでもありえた。

およそわれわれが記述しうるものはすべて、また別のようでもありえたのである。

もの (Dinge) にはア・プリオリな秩序は存在しない。」(5-634) ←[秩序化しているのは「事実」?]

★野矢によれば（『読む』 p. 242）



「私は私の世界である」のこの私とは、動作主体たる私ではない。動作主体たる私は世界の中の諸対象と並ぶひとつの対象にほかならない。←この動作主体たる私を対象として切り出してくるためにも、存在論的経験の主体たる私が要請される。

7-5. 独我論と主体否定テーゼの関係（『読む』 p. 245～）

独我論は主体否定テーゼを伴って完成

↓  
独我論「世界は私の世界」←しかし、主体否定テーゼに従えば「私の世界」と言われるべき「私」は世界内にはない。

「私」は世界が存在するための前提→現れてくるのはただ世界だけ

↓  
主体否定テーゼを経て、独我論の世界における「私」さえ消去される。

↓  
結果、「世界はこの世界である」と主張するだけのものになる。

野矢によれば、以上の論点を捉えてWは次のように主張する、と解釈。

↓  
「独我論を徹底すると純粋な実在論と一致することが見てとられる。独我論の自我は広がりやを欠いた点にまで縮退し、自我に対応する実在が残される。」(5-64)

\* 山本の解釈[点としての自我＝形而上学的主体が縮退され点になる。「純粋な実在論」＝独我論の世界における「私＝論理空間」が消去され、事実の総体だけが残る→「世界はこの世界」]

★この箇所の解釈として、入不二基義『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』（p. 51～p. 53）と永井均『ウィトゲンシュタイン入門』（p. 80～p. 84）参照。（レジュメの後に資料添付）

7-6. 主体否定テーゼと論理空間の唯一性（『読む』 p. 246～249）

主体否定テーゼの積極的側面：対象領域が与えられるために存在論的前提として主体を要請すること。それゆえ、この対象領域が与えられていることと、それが私の存在論的経験に基づいていることとは結びついている。その対象領域に基づいて張られた論理空間を「私の論理空間」たらしめる。

↓  
論理空間とはこの言語・この現実を生きる「私にとって」の思考可能性・理解可能性を開くもの。それゆえ、「他の論理空間を理解することはできない（語ることも示すこともできない）」ということから、端的に他の論理空間の存在可能性を抹殺するならば、すなわち、論理空間がこの論理空間ただひとつであると考えれば、そこから他の生を引き受ける私以外の主体もまた消去される。

↓  
独我論が帰結 独我論＝論理空間の唯一性

だがここで、逆説的に、この論理空間を共有するかぎり『論考』は〈われわれ〉という在り方を許容しうるが、実際問題として私と他者は〈われわれ〉ではない。野矢は、論理空間を共有しないが、現にそこにいる他者のことを「意味の他者」と捉えることから、独我論を「正しい」とは考えない。

↑

[野矢は非独我論者だから、認識論的には「それぞれの他者＝私」にのってのそれぞれの論理空間があると捉える。だがそれだと、〈論理空間の唯一性〉は否定される。〈唯一性〉とは、永井均的にいえば「他者という隣人」をもたない〈この私〉という独在性のあり方(実存)である。この実存の外に「〈この私〉でない者」を〈他者〉として想定し得ない。故に〈独我〉なのであろう。]

### 7-7. 野矢の解説 (p. 233~235)

- ①操作に対して、操作が施されるものをその操作の「基底」と呼ぶ。
- ②真理操作の基底は要素命題である。
- ③どのような要素命題になるかは経験に依存するが、真理操作は何を基底とするかによらず一定であり、それゆえ経験に依存しない。→ア・プリオリに定まっている。
- ④ここに、『論考』のもっとも重要な基本構図がある。
- ⑤一般に、操作は何を基底にするかによらず、定まったものとしてある。
- ⑥たとえば「裏返す」という操作は一定であり、同様に、どのような要素命題が与えられようとも、それに対する真理操作は一定のものとなる。
- ⑦他方、どのような要素命題が真理操作の基底として与えられるかは、経験に依存するものとなる。
- ⑧要素命題は可能な事態を表現するものであるが、そのすべてを私は経験しているわけではない。
- ⑨要素命題は名からなり、名は対象を表す。
- ⑩対象は私が経験した事実から取り出されたもの。それゆえ、対象のレベルでは可能的なものは何ひとつない。
- ⑪対象はすべてこの世界に存在するもの、事実において私が出会ったものであり、可能的なものは既知の対象の組合せとしてのみ開かれる。すなわち、完全に私の経験に依存しているのは名と対象の対であり、そのかぎりにおいて、名の可能な組合せたる要素命題も、また私の経験に依存する。
- ⑫ここに、言語が「私の言語」として特徴づけられる理由がある。←Wはまさにこの地点に独我論を位置づける。
- ⑬要素命題が定まれば、そこから複合的な命題を作り出していく。
- ⑭それゆえ、「言語の限界」を定めるものは、操作ではなく、その基底にある。
- ⑮言語の限界は思考可能性の限界であるから、「どれだけのことが考えられるのか」という問いに対する答えは、私がどのような事実を経験しているのかに決定的に依存するものとなる。
- ⑯他者の位置づけ：私と異なった経験者＝論理空間も異なっている→「異なる論理空間」の別称
- ⑰異なる論理空間を私の論理空間に位置づけることは、不可能。→私の思考可能性のうちから他者が消えることになる。←『論考』の独我論。

### 8. 操作と形式／数・論理学・数学・自然科学 (6~6-3751)

野矢によれば、独我論に続いて論理・数学に移る展開は自然なもの。

「操作と基底」これが論考を読み解くための鍵。

この見地からすれば、大雑把に言って、命題 5-6 以前は「操作と基底」という枠組に到達するための議論であったと言える。

この枠組が獲得されるや、まずは基底に焦点を当てて議論を開始、それが独我論。

とすれば、その議論が終わった時点で、こんどは操作に焦点を当てた議論が始める。まさに そのようにして6番台が始まる。(『読む』 p.250 ~ p.251)

#### 8-1. 操作と数

「真理関数の一般形式こうである。  $[D, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$

これが命題の一般形式である。」(6)

「これが語っていることは、すなわち、いかなる命題も要素命題に操作  $N(\bar{\xi})$  をくりかえし適用した結果である、ということにほかならない。」(6-001)



「数は操作の冪である。」(6-021) [冪＝反復回数→無限性へ、数は操作である故に「対象」とはならない。Wは数を構成主義的に捉えるが、フレーゲ、ラッセルは数をプラトニズム的に捉える]  
数という概念は、すべての数に共通するもの、すなわち数の一般形式にほかならない。

数という概念は変項である。

そして数の等しさという概念は、特定の数の等しさすべてに対する一般的形式である。」(6-022)

「整数の一般形式はこうである。[ $0, \xi, \xi+1$ ] (6-3) ←[自然数が帰納的に規定される]

「集合論は数学ではまったくよけいである。←[フレーゲ、ラッセルは数を集合の性質／集合の集合として捉える]

このことは、数学において要求される一般性が偶然的なものではないことと結びついている。」

(6-031) →[つまり必然的ということ。以下、論理学も含めて、必然性を巡る問題]

★野矢によれば、『論考』は、論理であれ、数学であれ、内的関係の成立を、すなわち必然性の由来を、すべてただ操作において見てとうろうとした。操作のみが強い意味でア・プリオリなものであり、それゆえ必然性はすべて操作に由来するものとして捉えられたのである。このことが、Wが数を操作のベキとして捉えた根本理由であった。→しかしそれはまちがいがい。後にそのまちがいをW自身認めるところとなった。要素命題の相互独立性は撤回され、単純な名が相互に内的関係に立ちうるということが認められるようになる。(……) 論理の根本的な語りえなさについての『論考』の見解はなお正しいものとして残されるだろう。」(『読む』p.280～p.281)

## 8-2. 論理学

「論理学の命題はトートロジーである。」(6-1)

「論理学の命題は何も語らない。(それは分析命題である。)」(6-11)

「論理命題の真理性はただそのシンボルだけから知られうる。(6-113)

「論理学の命題がトートロジーであることは、言語の、すなわち世界の、形式的——論理的——性質を示している。

構成要素がこの仕方では統合されるとトートロジーになるということ、このことがそれら構成要素の論理を特徴づける。」(6-12)

「(……) 経験によって論理命題を反駁することができないように、経験によって確証することもできないのはなぜなのか。論理学の命題を反駁するような経験がありえないだけでなく、それを確証する経験もまた、ありえないのである。」(6-1222) ←[経験は、ア・ポステリオリで偶然的かつ有限的だから]

「論理命題は世界の足場を記述する。というよりもむしろ、それを描き出している。論理命題は何ごとかを「扱う」ものではない。名が指示対象をもち、要素命題が意味内容をもつことは、論理命題においては前提にされている。(…) 論理は記号を本質的に必要とし、その記号がもっている本質的特性それ自身が、自らを語るのである。それゆえ、なんであれある一つの記号言語の論理的構文論を知るならば、そこにおいてわれわれは、[すべての言語記号に共通する]論理学の全命題を手にすることになる。(6-124)

「[真なる]論理命題をあらかじめすべて記述することは可能である。」(6-125)

「それゆえ論理においても驚きはけっして生じない。」(6-1251) ←[必然的であるから驚きはない]

「論理命題の証明とは、すなわち、一定の操作をくりかえし適用することによって、当の論理命題を別の論理命題から作成することにほかならず、しかもその操作は、最初のトートロジーから次々にトートロジーを作り出していくものにほかならない。」(6-126)

「論理学においては、過程と結果は同等である。(それゆえいかなる驚きも生じない。)」(6-1261)

「論理学は学説ではなく、世界の鏡像である。

論理は超越論的である。」(6-13)

### 註101)「超越論的」(『論考』p.212)

たんに「経験によって把握しえない」という意味での「超越的」ではない。この世界に対して超越的でありつつも、なお、この世界がこのようであるために要請されるもの、それが「超越論的」と言われるもの。論理は、それ自身を語ることはできないが、世界を語るために(そし

てまた世界が語られたようであるために) 不可欠なものであり、「超越論的」なのである。

### 8-3. 数学

「数学とはひとつの論理学手方法にほかならない。

「**数学の命題は等式**であり、それゆえ**疑似命題**である。」(6-2)

「**数学の命題はなんらかの思考を表現するものではない。**」(6-21)

「**実際われわれは、生活において数学の命題などまったく必要としない。**われわれはただ、数学に属さぬ命題からやはり数学に属さぬ他の命題を導くためののみ、数学の命題を用いる。

(哲学においては、「われわれはその語、その命題を、いったい何のために使用するのか」という問いはつねに有益な洞察をもたらす。)(6-21)

「**論理学のトートロジーにおいて示す世界の論理を、数学は等式において示す。**」(6-22)

←[[論理が使いこなせており、かつ、そこにおいて何の混乱にも陥っていない人であればトートロジーなど必要としないように、操作を反復適用でき、その反復において何の混乱にも陥っていない人ならば**数式は不要**となる。』『読む』p.277]]

「**フレーゲは、このような「 $(1+1) + (1+1)$ 」と「 $1+1+1+1$ 」二つの表現は同じ指示対象をもつが、その意義 (sinn) は異なる、と論じた。**→[フレーゲ; 指示対象=意味, *Bedeutung*], 訳注 102 参照]しかし、**統合で結ばれた二つの表現が同じ指示対象をもつことは、その二つの表現それ自体から見るととられることであり、それを示すのに等式は不要**なのである。ここに、等式の本質がある。

(6-231)

「(…) **数学の表現していることを捉え、それを事実と比較してその正しさを確かめる必要など、ありはしない。**」(6-2321) →[数学はア・プリオリな操作]

「**等式は、私が二つの表現を検討する観点を指し示すにすぎない。すなわち、指示対象の等しさという観点から見よ、というわけである。**」(6-2323)

「**数学の問題を解決するのに直観は必要か。この問いは、ひとはこう答えねばならない。言語こそがここで必要とされる直観を与える。**」(6-233)

「**数学は論理を探究するひとつの方法である。**」(6-234)

「**数学的方法の本質は、等式を用いて仕事をするという点にある。数学の命題がすべての命題ごとに自明であらねばならぬということも、つまるところこの方法に由来するのである。**」(6-2341)

「**等式は二つの表現の置換可能性を表現しており、そしてそれに従って、われわれはある表現を別の表現へと置き換え、いくつかの等式から新たな等式へと進んでいくのである。**」(6-24)

### 8-4. 自然科学におけるア・プリオリなもの

「**論理学の探究とは、[可能な]すべての法則性の探究にほかならない。そして、論理学の外では、いっさいが偶然的である。**」(6-3)

「**いわゆる帰納法則は、およそ論理法則ではありえない。というのも、それは明らかに有意な命題だからである。それゆえまた、それはア・プリオリな法則でもありえない。**」(6-31)

「**因果法則とは法則ではない。法則の形式である。**」(6-31)

「**理由律、自然の連続原理、自然の最少消費の原理、等々、これらはすべての命題は、科学の命題に与えうる可能な形式をア・プリオリに洞察したもの**にほかならない。」(6-34)

←[理由律等々は、訳注 108 参照、しかし理由律をア・プリオリなものとする、世界のすべては予め決定論的に規定されていることにならないか？

≪われわれはつねにア・プリオリに、あらゆるものは根拠をもっているということを前提しており、そしてこの前提が、なにごとにつけくなぜ>と問う権利をわれわれに与えてくれるのであるから、このくなぜ>をあらゆる学問の母と名づけることが許されるであろう。— アルトゥル・ショーペンハウアー (1813 年)『充足根拠律の四方向 に分岐した根について』≫

[『**連語**』 (principium rationis sufficientis Satz vom zureichenden Grunde の訳語) 哲学で、どんな事実でも、それが成立するには、十分な理由がなければならぬと要求する原理。推理の真理を保証する矛盾律に対して事実の真理を保証するものとしてライプニッツが、はじめてこの語を用いた。また、ショーペンハウエルは、生成、認識、存在、行為のそれぞれについて四種を区別した。理由律。充足律。充足理由律。[論理学 (1916)] ,精選版 日本国語大辞典の解説]

「(…) ニュートン力学によって世界が記述されうるということは、世界について何事も語りはしない。他方、ニュートン力学によって世界が事実そうであるとおりに[完全に]記述されうるということ、このことは世界について語るものとなっている。あるいはまた、さまざまな力学のうち、ある力学によって世界がもっとも単純に記述されるとすれば、そのことも世界について何事かを語るものとなろう。」(6-342) ←[世界が事実そうであるとおりに[完全に]記述されうるということ=命題]

★以下、力学や物理法則と世界記述に関しての見解が書かれる。

「ヘルツの言い方を借りて、こう言ってもよいだろう。ただ法則に従って連関のみが思考可能である。」(6-361)

★6-3611~6-36111では、時間と空間の記述形式についての見解。訳注109参照。

「記述されうること、それはすなわち起こりうることである。そして因果法則が許容しえないものは、すなわち記述されえないものである。」(6-632) →[記述の形式と必然性]

## 8-5. 必然と自由

「ある出来事が起こったために必然的に他の出来事が引き起こされるといった強制は存在しない。存在するのはただ、論理的必然性のみである。」(6-37) →[論理的必然性は実際の出来事を強制しない。「起こりうべく起きること」と「起きたこと」の差異]

「現代の世界観はすべて、その根底に於いて、いわば自然法則を自然現象の説明とする誤りを犯している。」(6-371)

「かくして、彼らは自然法則を何か侵すべからざるものとみなし、その地点で歩みを止める。ちょうど、古代の人々が神と運命の前でそうしたように。

そしてそれは、両者ともに正しいとも言えようし、また、両者ともにまちがっているとも言えよう。むしろ、現代の体系のもとではあたかもすべてが説明されるかのように思われているの対し、古代の人々の場合はそこにはっきりと終端(限界)を認めていた分、古代の方がより明晰であったと言えるだろう。」(6-372)

「世界は私の意志から独立である。」(6-373) ←[この場合の「世界」とは? 主体は「私の世界=独我論」の外にいる]

「(…) 意志と世界の間にはそれを保証するいかなる論理的連関も存在せず、さらにまた、かりに意志と世界の間になんらかの物理的連関が立てられたとしても、その物理的連関をそれ自身を意志とすることはもはやできないからである。」(6-374)

「論理的必然性のみが存在するように、ただ論理的不可能性のみが存在する」(6-375)

★二つの色が同時に視野の同じ場所を占めることができない(色の論理構造)=両立不可能性に関して。

「(…) この両立不可能性が物理学でどう表現されているかを考えてみよう。(…)

(二つの要素命題の論理積は、明らかに、トートロジーにも矛盾にもなりえない。他方、視野の一点が二つの異なる色をもつというのは矛盾である。)」(6-3751) →[Wによれば、色は要素命題にならない。cf;「要素命題の相互独立性の要請」]

## 8-6. 野矢の解説 (p. 236~283)

①世界記述のような形をしていながら実際には世界記述ではなく、記述の形式を示しているような命題の身分を、数、論理学、数学、自然科学に関して、論じていく。

②数の問題。「3は2より大きい」、これは世界記述の命題と異なり、必然的に成立する。この必然性の正体は何か。

③『論考』は数を操作の反復回数として捉える。なぜか。「操作と基底」という『論考』の基本構図において、基底は経験的であり、ア・プリアリな性格をもつものはただ操作に由来するものでしかないから。操作3回は操作2回を含んでいる。これは操作の本質からしてそうであり、そうでないことを考えられない。このことが「3は2より大きい」が必然的に成立することの内実である。

④論理的命題の必然性も操作に由来する。

⑤一般に世界記述の命題の真偽はそれがそのような要素命題を含んでいるかに依存する。: 基底の真

偽に依存。

- ⑥それに対して、論理命題の真理性は基底にはまったく依存しない。：論理命題が論理空間の全域において真となることによって示されている命題は「トートロジー」と呼ばれる。
- ⑦論理命題はまさしくトートロジーであり、トートロジーであることによって真理操作のあり方を示している。
- ⑧ $[1+2=3]$ のような数学の等式も、操作のあり方を示している。
- ⑨操作は、それゆえ、世界記述の命題ではない。→世界記述する際に用いる操作のあり方を示したものであり、その意味で記述の形式を与えている。
- ⑩Wは自然科学の法則命題も世界的記述ではなく、記述の形式を与えるものと論じる。「時間」「空間」「因果」といった形式に関わる概念を、カントのように直観の形式や判断の形式として捉えるのではなく、あくまでも記述の形式を与えるものとして捉えようとしている。
- ⑪なんであれ、ある出来事を語ろうとするならば、その出来事は時間的空間的位置をもっていなければならない、またまったく他の出来事と因果関係をもたないようなものとして記述することは許されない。

## 9. 倫理 (6-4~6-45)

山本の見解：[「操作と基底」という枠組の到達→「基底」に焦点化した独我論(私の世界)→「操作と形式」に焦点化→「記述の形式」(論理学=トートロジー、数学=等式、自然科学=法則の形式)とWは解明してきた。

そしてここまでが、「語りうること=命題」のすべてであり、「すべての命題は等価値である」(6-4)故に、「世界の中には価値は存在しない。それは世界の外になければならない」(6-41)という。

「世界の外」にある故に語り得ないこと、そのことを「語ることの限界」によって「示す」ことこそが、『論考』の核心的テーマである。

それは(世界の限界たる主体の)倫理とその担い手たる意志。「倫理は超越論的である」(6-42)とは、倫理(形而上学的主体)が世界のあり方を条件づけるということなのか？ しかしその担い手たる「善き意志も悪しき意志も、言語で表現しうるもの(論理形式)を変化させることはできない」から、「そうした意志によって世界は全体として別の世界へと変化するのだからなければならない」(6-43)とWは言う。←(「総体としての実質を変えるのであって、その内容(個々の事実)を変えるのでも、その形式を変えるのでもない。」永井『W入門』p.78)

「善き意志/悪しき意志」によって「幸福な世界/不幸な世界」にすることができる、と示したいのか？

★Wが編集者に宛てた手紙を再掲載。

「この本の意義は倫理的なものです。(…)私の仕事は二つの部分からなる、そこに書かれていることと、書かれなかったすべてと、というようにです。そして、重要なのは、実はこの後者の方なのです。というのは、私の本は、倫理的なことがらをいわば内側から限界づけており、そして私の確信するところでは、倫理的なことがらとは、ただそのようにしてのみ限界づけられうるものだからです。」]

### 9-1. 倫理学

「すべての命題は等価値である。」(6-4)

「世界の意義は世界の外になければならない。世界の中ではすべてがあるようにあり、すべてが起こるように起こる。世界の中には価値は存在しない。

価値の名に値する価値があるとすれば、それは、生起するものたち、かくあるものたち(一切の出来事や状態)すべての外になければならない。生起するものも、かくあるものも(出来事、状態)、すべては偶然だからである。

それを偶然でないものとするのは、世界の中にあるある何ごとかではありえない。世界の中にあるとすれば、再び偶然となるであろうから。

それは世界の外になければならない。」(6-41)

「それゆえ倫理学の命題も存在しえない。

命題(倫理という)より高い次元をまったく表現できない。(6-42)

「倫理が言い表しえぬものであることは明かである。

倫理は超越論的である。

(倫理と美はひとつ) (6-42) → [「永遠の相のもとに」、これが、論理と倫理と美をつなぐ要となるのではないか』『読む』 p.292]

「倫理的なものの担い手たる意志について語ることはできない。」 (6-43)

「善き意志、あるいは悪しき意志が世界を変化させるとき、変えうるのはただ世界の限界であり、事実ではない。すなわち、善き意志も悪しき意志も、言語で表現しうるものを変化させることはできない。

ひとことで言えば、そうした意志によって世界は全体として別の世界へと変化するのだからなければならない。

幸福な世界は不幸な世界とは別物である。」 (6-43)

## 9-2. 死と不死

山本の見解：[無時間性においては、瞬間も永遠も「いま」に収斂する。その「いま」の肯定において、「生もまた、終わりをもたない。」 (6-4311) 故に、「生の謎の解決は、時間と空間の外にある。」 (6-4312) ことを示す。世界の終わりは、「私という世界」が消滅するときと同時である。]

「同様に、死によっても世界は変化せず、終わるのである。」 (6-431)

「死は人生のできごとではない。ひとは死を体験しない。

永遠の時間的な永続としてではなく、無時間性と解するならば、現在に生きる者は永遠に生きるものである。

視野のうちに視野の限界は現れないように、生もまた、終わりをもたない。」 (6-4311)

「(…) 時間と空間のうちにある生の謎の解決は、時間と空間の外にある。(ここで解かれるべきものは自然科学の問題ではない。」 (6-4312)

## 9-3. 神秘的なもの

「野矢の死は世俗のことであり、私は野矢と一蓮托生であるのだが、その私の存在は「限界づけられた全体として世界を感じる」とともに、存在論的神秘(他のあり方を語ることも示すこともできないというそのことにおいて感じとられる「必然性」という身分をもつ。死が人生のできごとでないというのは、それゆえにほかならない。」(『読む』 P.301)

「世界がいかにあるかは、より高い次元からすればどうでもよいことでしかない。神は世界のうちには姿を現しはしない。」 (6-432)

「事実はただ問題を導くだけであり、解決を導きはしない。」 (6-4322)

「神秘とは、世界がいかにあるかではなく、世界があるというそのことである。」 (6-44)

「永遠の相のもとに世界を捉えるとは、世界を全体として——限界づけられた全体として——捉えることにほかならない。

限界づけられた全体として世界を感じることを、ここに神秘がある。」 (6-45)

←[感じること=限界は語ることも示すこともできない。「論理空間全体とともに見られた対象は不生不滅の実体として捉えられ、ここに、永遠の相のもとに捉えられた世界が開ける。この観点から言うならば、『論考』は世界を永遠の相のもとに開くための試みであったとも言えるだろう。」『読む』 p.293]

←[Wとハイデガーを媒介するのはキルケゴール。世紀転換期ウィーンにおけるキルケゴール復興運動のなかで培われた倫理的情熱。1929 年末シュリック邸での談話のなかで、Wはハイデガーにふれ、「私はハイデガーが存在と不安について考えていることを、十分に考えることができる。人間には、言語の限界に向かって突進しようとする衝動がある。たとえば、何かかが存在するという驚きを考えてみるがいい。この驚きは、問いの形で表現することはできないし、また答えはなど存在しない。われわれがたとえ何かを言ったとしても、それはすべてア・プリオリに無意味でしかない。(因みに、Wはハイデガーの『形而上学何か』1929 年に触発された)『ウイトゲンシュタイン小事典』 p.271 ~ p.271]

#### 9-4. 野矢の解説 (p. 238~239)

- ①倫理命題もまた世界記述ではない。
- ②倫理命題とは異なった意味において、倫理命題にも「必然的」と呼びうるような性格が見られる。
- ③倫理の問題は、「幸福」の問題へと収斂。ここでの幸福とは世俗的なエピソードではない。「この世界の苦難を避けることができないというのに、そもそもいかにしてひとは幸福でありうるのか。」(『草稿 1914—1916』1916年8月30日) ←ここにWの問題がある。
- ④幸福であること／不幸であることは、世界のあり方に左右されないものでなければならない。
- ⑤ここまでの『論考』の叙述を「幸福」に狙いを定めたものとして読み直すことは可能。
- ⑥「世界は事実の総体」として現れる→世界を「対象」として分析→対象の組合せとしての「事実」はさまざまに変化→しかし諸可能性の礎石としての対象は無変化→ここに世界が「永遠の相のもとに」姿を現す→世界の可能性の礎石として対象=私の経験の範囲であることが確認される→世界は「私の世界」として現れる→さらに一歩進めると
- ⑦私の世界は「生きる意志」に満たされなければならない。事実を経験し、そこからさまざまな思考へと飛躍していただくだけでなく、その世界を積極的に引き受けていこうとする、その意志。
- ⑧どのような世界であれ、生きる意志に満たされうる(幸福な生)し、生きる意志を失いうる(不幸な生)。こうして、論理という表の顔に導かれながら論述を進めてきた『論考』は、その最終段階において、「幸福に生きよ！」(『草稿 1914—1916』1916年7月8日)という声を響かせる。

#### 10. 謎の解消 (6-5~7)

「答えが言い表しえないならば、問いを言い表すこともできない。

謎は存在しない。

問いが立てられうるのであれば、答えもまた与えられうる。」(6-5)

「たとえ可能な科学の問いがすべて答えられたとしても、生の問題は依然としてまったく手つかずのまま残されるだろう。これが、われわれの直観である。」(6-52)

「生の問題の解決を、ひとは問題の消滅によって気づく。

(疑いぬき、そしてようやく生の意味が明らかになったひとが、それでもなお生の意味を語ることができない。その理由はまさにここにあるのではないか。)」(6-521)

「だがもちろん言い表しえぬものは存在する。それは示される。それは神秘である。」(6-522)

「語りうること以外は何も語らぬこと。自然科学の命題以外は——それゆえ哲学とは関係のないこと以外は——何も語らぬこと。そして誰か形而上学的なことを語ろうとするひとがいれば、そのたびに、あなたはその命題のこれこれの記号にいかなる意味も与えていないと指摘する。これが、本来の正しい哲学の方法にはかならない。この方法はそのひとを満足させないだろう。——彼は哲学を教えている気がしないだろう。——しかし、これこそが、唯一厳格にして正しい方法なのである。」(6-53) →[cf;論理実証主義]

「私を理解する人は、私の命題を通り抜け——その上に立ち——それを乗り越え、最後にそれがナンセンスであると気づく。そのようにして私の諸命題を解明を行なう。(いわば、梯子をのぼりきった者は梯子を投げ捨てねばならない。)

私の諸命題を葬りさること。そのとき世界を正しく見るだろう。」(6-54) ←[梯子の譬喩は仏陀の筏の譬喩と同じ]

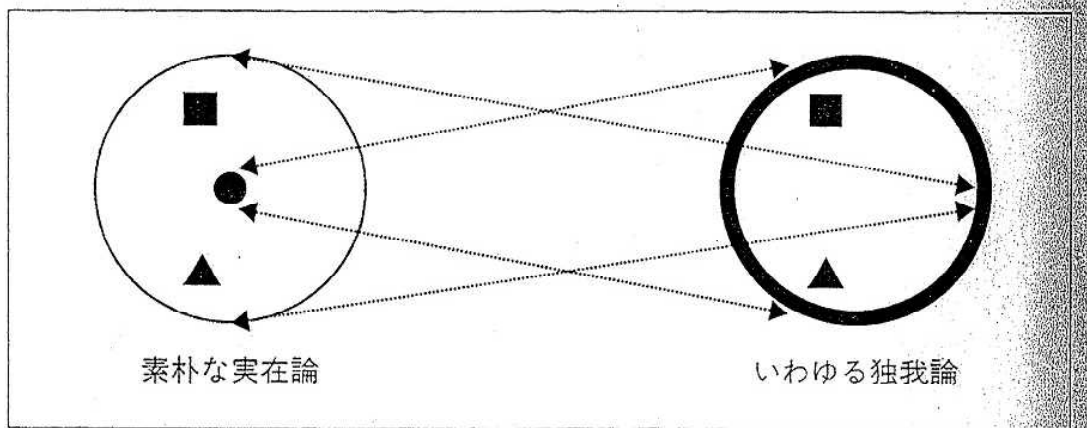
「語りえぬものについては、沈黙せねばならない。」(7)

#### ■10の野矢の解説 (p. 240)

- ①語りうるもののみを語ること。
- ②語りえぬものは、沈黙のうちにそれを引き受け、生きること。
- ③語ることによって答えさせようと強いながら、しかし語りえぬもの前で身動きできなくさせるものを「謎」と呼ぶならば、Wは『論考』によってついにその呪縛を解きえたと信じるに至った。
- ④かくして「謎は存在しない」(6-5)と言われる。
- ⑤そして、「語りえぬものについては、沈黙せねばならない。」(7)

■資料

図3枚は、入不二基義『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』(NHK出版)より転載。



● = 私/A

図2

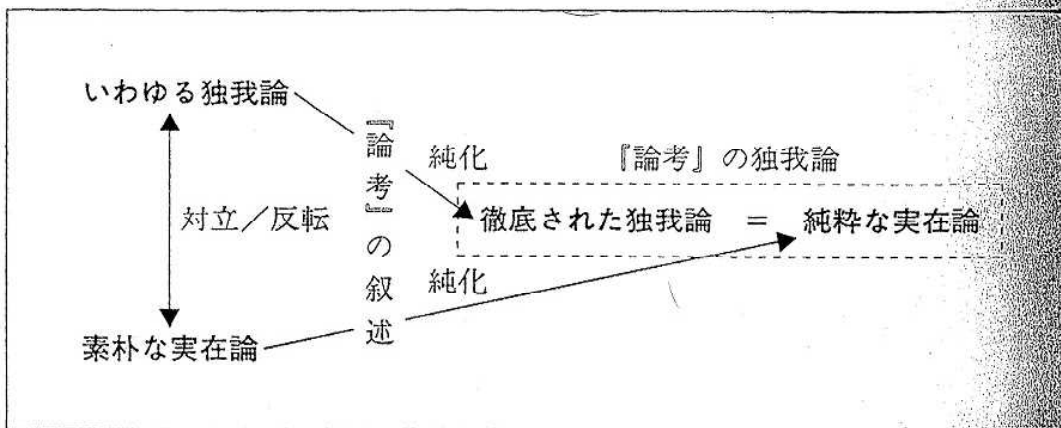


図3

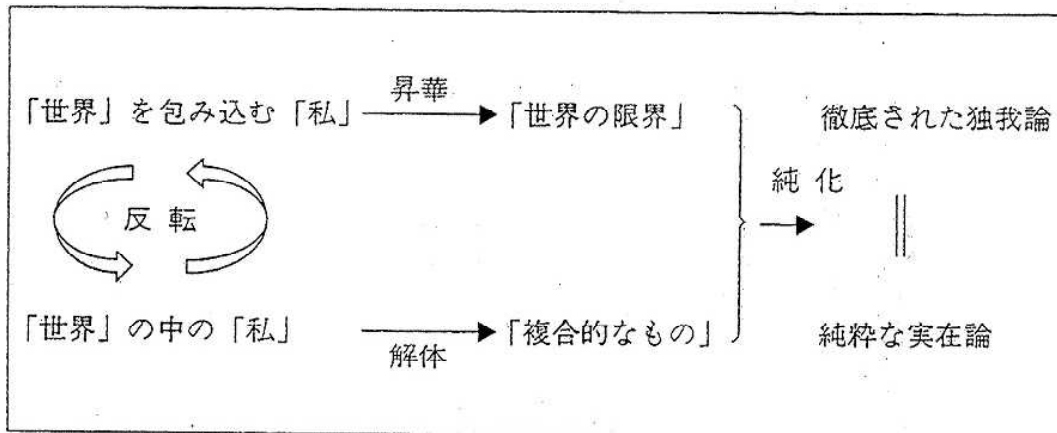


図4

★入不二基義『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』 p. 51～p. 53 (NHK出版)

素朴な実在論では、「世界」の内に、「私」に相当する人物（先述のA）が残っていた。いわゆる独我論では、「世界」を自らの内に包み込むような超越的な「私」が、「世界」の外に立てられていた。

しかし、純粋な実在論では、世界内の「私」＝「A」は、心的な要素の複合体へと解体される。「世界」の中には、信じたり思考したりする単一の主体など、存在しない。「世界」の中にあるのは、諸要素とその組み合わせから成る事実のみである。純粋な実在論は、「私」＝「A」という主体（素朴な実在論が考えるような主体）を、「世界」内の事実へと解消・解体してしまうのである。

徹底された独我論の段階では、もはや「世界」をその外から包み込むような超越的な「私」が、そのまま「私」に他ならないのだから。徹底された独我論は、いわゆる独我論の「私」を「世界」全体の〈ただ一つ〉という〈かたち〉へ変換・昇華してしまうのである。

その結果、純粋な実在論と徹底された独我論は、次の二点において、ぴったりと合致してしまう。

(1) 「世界」の内にあるのは、もの（対象）の組み合わせから成る諸事実だけである。

(2) 「世界」の内にも「世界」の外にも、「私」という特別な主体は存在しない。

徹底された独我論の「私」とは、「世界」全体が〈ただ一つしかないこと〉に他ならず、「世界」内の諸事実がどのようなあり方であっても、その内容に依存することなく成り立つ唯一性である。つまり、徹底された独我論の「私」（＝唯一性という〈かたち〉）は、「世界」内の諸事実のあり方には何ら影響を与えない。だからこそ、「世界」の中から「私」が消し去られても（＝「私」が「世界」の〈かたち〉として昇華されても）、その「世界」内の諸事実（＝実在）の方は、何も影響を被らない。「独我論の私というものは、広がりを持たない点へと縮退し、その私と対応する実在がそのまま残る」というのは、そういうことである。